

博報財団 第9回「国際日本研究フェロシップ」成果報告書

I. 研究概要

※定型フォーマット有 (A41~2枚)

※全て日本語で作成

氏名 (在住国名)	トムソン木下千尋 (オーストラリア)
所属	ニューサウスウェールズ大学
招聘回 (招聘研究期間)	第 9 回 (2014年 10月 4日 ~ 2015年 2月 22日)
受入機関	お茶の水女子大学
招聘研究テーマ	日本語教育の連続性：オーストラリアの教育現場から日本の職場へ
研究目的	<p>日本における研究活動全般の目的は、以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学校の日本語教育と実社会の日本語使用の連続性の研究を進める 2. 日本で参加可能な学会、研究会、勉強会等に参加し、自己研鑽する 3. 日本社会に参加し、体験し、観察する <p>そのうち、1の研究テーマについて、ここで報告する。</p>
<p>研究概要：</p> <p>1. 研究の背景</p> <p>オーストラリアの日本語学習者数は世界4位で、学習者数が人口に占める割合も他の英語圏の国と比べて特出している。10人に一人の小中高校生が日本語を勉強し、日本語が第一学習言語の位置を占めるオーストラリアは、日本語教育大国として知られているが、オーストラリアの日本語教育は、主に二つの問題を抱えていると言える。一つ目は学習者数の全般的な減少で、二つ目は、学習者が上級まで学習を持続しない、あるいはできないというアーティキュレーション、連続性の問題である。この二つの問題は関連していると言えるが、本研究では後者を取り上げる。</p> <p>現在、オーストラリアの全日本語学習者の96%が小中高校に在籍している。これは、オーストラリアの学習者の大多数が初級学習者であることを意味し、大学で学習する3%の学習者の内訳もほとんどが初級である。すなわち、小中高校で日本語学習を開始するオーストラリアの子どもたちが大学でも日本語を継続して学習していき、上級、超級の力をつけていく理想的な連続性は達成されていないことがわかる。この連続性の欠如は日本語に限らず他の外国語科目にも見られる現象ではあるが、オーストラリアの研究によると、日本語学習の連続性は、他の外国語より際立って低い。これにはいくつかの原因が考えられる。非漢字圏の学習者には日本語は難易度が高いことがまず挙げられる。また、大学受験や、大学内のプログラム、時間割などから来る制約のため、継続したくてもできないケースも見られる。加えて、高度経済成長期の日本語ブーム時とは違って、日本語学習の将来性が見えないことが考えられる。学習者にとっても、学習者の保護者にとっても、また、進路指導の教員にとっても、日本語学習後の道筋が見えないことが問題である。</p> <p>2. 研究の目的</p> <p>本研究では、学校教育、大学教育における日本語教育が実社会での日本語使用とどのように連続性を保っているかをモチベーション（動機付け）研究の領域から考察するものである。研究の成果は 現在のオーストラリアにおける日本語学習者、及び、将来日本語学習を考えるであろう若者たちが、日本語学習と将来の連続性を知る機会を提供するように、公開したいと考えている。</p> <p>3. 理論的枠組み</p> <p>言語学習のモチベーションの研究は、カナダの研究者ロバート・ガードナーが過去数十年間にわたり牽引</p>	

してきた。ガードナーの Socio-Educational Model (社会—教育モデル) は Integrativeness (統合的動機) という考え方を核とし、様々な実証研究を生んできた。統合的動機とは、ある付加価値の感じられるコミュニティで、そこの人々とコミュニケーションするために、その土地の言語を学びたいという気持ちを指す。しかし、この考え方は、英語が国際語として認識される昨今、統合的動機の統合する先、つまり目的とするコミュニティの限定が難しくなったこともあって、モチベーションの研究に転機が訪れている。

ゾルタン・ドルニエイは、ガードナーのモデルの後継モデルとして、第二言語の動機付けの自己システム (L2 Motivational Self System) を提唱している。このシステムは外国語の「なりたい自分」 (Ideal L2 Self)、「なるべき自分」 (Ought-to L2 Self) と「日本語学習体験」 (L2 Learning Experience) からなっている。「なりたい自分」は、日本語を使って仕事をしている自分のイメージを頭に描くことなどで、「今の自分」を「なりたい自分」に近づけようと、モチベーションがあがるというものである。「なるべき自分」は、日本語でいい成績をとるという親の期待に応えようと一生懸命勉強するというようなものである。そして、「日本語学習体験」は、学習環境から得る成功体験や、楽しい体験が、次の学習の動機付けになるというものである。ドルニエイは、「なりたい自分」と「なるべき自分」のバランスをとり、モチベーションを維持していくとよいと言うが、同時に学習者がすべて「なりたい自分」を持っているとは言えないことも指摘している。そこで、第二言語で成功したロールモデルを紹介するなど、「なりたい自分」を生み出す仕掛けがあると述べている。

4. 研究方法

本研究は日本で働くオーストラリア人日本語話者にインタビューを行い、それぞれの日本語学習に関するライフストーリーを語ってもらい、それを分析するという手法をとる。ライフストーリーから日本語学習当時の「なりたい自分」「なるべき自分」「日本語学習体験」に関する部分を抽出して検討する。

展望：

2月2日現在、インタビューは五つ取れて、書き起こし作業中である。オーストラリア大使のインタビューも取れた。インタビューはできればもう少しとりたい。今後、書き起こしたインタビューを研究として検討すると同時に、それぞれのライフストーリーをまとめて、できればオーストラリア大使館のホームページに掲載してもらいたいと思っている。研究結果は学術誌に投稿したい。

II. 研究成果論文

※定型フォーマット無 (A4 枚数制限なし) ※全て日本語で作成

※成果報告書の提出期限： 2015年9月30日 (短期前期は3月31日迄)

※受入担当者の所見 (様式 K) と合わせて期日までに提出してください。